激動の時代を新しい視点から学ぶ日本近現代史

第二次世界大戦と開戦問題

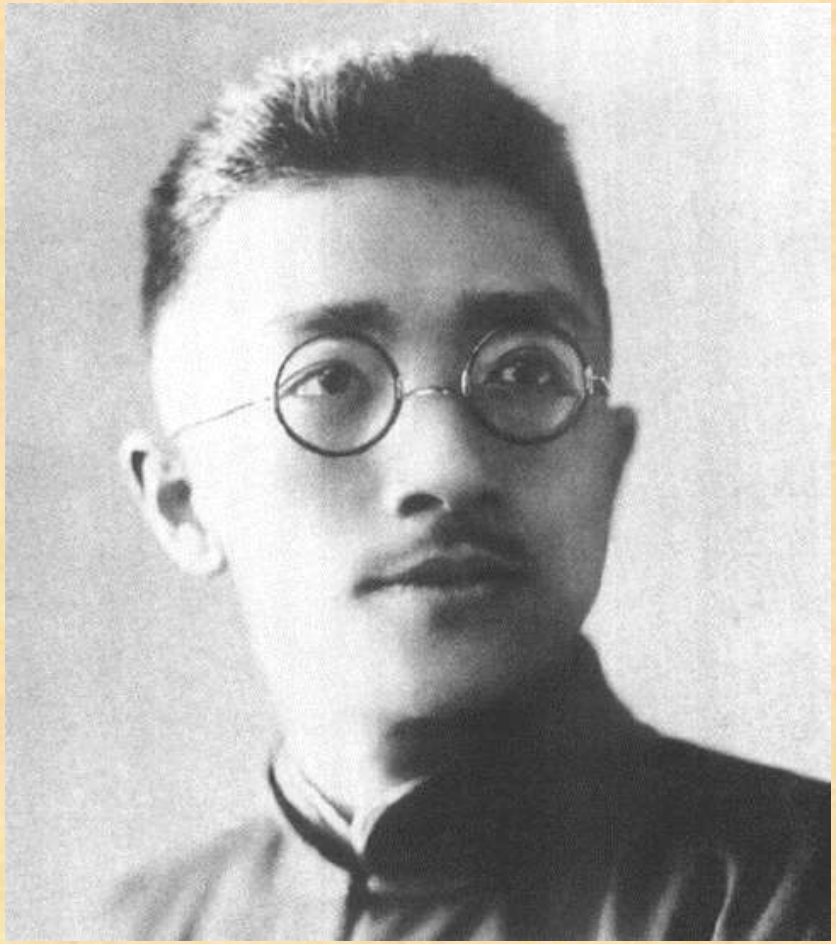
～日本はなぜ米英開戦に踏み切ったのか～

（http://jugyo-jh.com/nihonsi/）

はじめに：

1935年：胡適が送った三通の手紙

①1933年の塘沽停戦協定で中国は「満州国」を黙認
②日本は和協外交を唱え、長城以南への出兵はしないといったが、
③日本軍は華北へ本格的に進出、
次々と傀儡政権が出現。



胡適(1891～1962)
近代中国の代表的知識人、白話運動で陳独秀らと新文化運動を促進した。のち国民党のブレイン、駐米大使として重要な役割を果たす

1935年当時の東アジア
「決定的な対決を避けた諸外国」(入江昭)

日本を実力で阻止せねばならないほど、各国の安全や経済利益が脅かされているとは考えていなかった。

⇒国内の経済問題に関心が集中。当分は自国の軍備充実が先決

①ソ連…国内工業化が最優先で、日本軍との衝突を避けようとし、東清鉄道を日本に譲渡

②イギリス…東アジアの国策は経済中心。日本とのいざこざに巻き込まれるのをいやがる。中国の財政立て直しに協力する程度

③アメリカ…最初は制裁も考えたが、日本とたたかうほど切実でない。

⇒日本の行為を是認はしないが、積極的に介入し日本を牽制しようとはしなかった。

1935年～：華北分離工作が進行するなかで

類別	「国際的解決」に対する判断	対日政策の選択
判断1	英米等の援中制日の即時実施	妥協拒否
判断2	援中制日の実施の期待大	妥協拒否
判断3	現状における援中制日の期待なし。長期的な国際情勢変化は期待可	局部的な対日妥協による現状維持を優先国際情勢の変化を見て原状の回復を実現
判断4	援中制日による「国際的解決」は現在、将来とも不可能	「国際的解決」を断念、全面的妥協二国間の解決を図る

鹿錫俊「蒋介石の『国際的解決』：1937－1941」（東方書店）より作成

盧溝橋事件～リットン調査団ごろ

孫科らの判断と選択

蒋介石、両論併記的対応

汪兆銘ら和平派の判断

中国解放には世界戦争が必要

胡適の王世杰(政府高官)への手紙(1935)

1、中国の取り得るべき二つの道

①「代価ある譲歩」…満州国を承認し、引き換えに譲歩を得る。

②将来太平洋で発生する大戦で敵の覇権をくつがえす

2，「近い将来のあの世界戦争」を実現するには。

①第三国が戦争を起こすことを期待することは困難

②ならば多大な犠牲を覚悟しても抵抗するしかない。

3，その犠牲とは

①沿岸の港湾や長江下流域がすべて占領される

②華北の諸省なども占領される

③長江封鎖、財政も崩壊、天津・上海なども占領される

こうした苦戦が3～4年続く。

胡適(1891～1962)
近代中国の代表的知識人、白話運動で陳独秀らと新文化運動を促進した。のち国民党のブレイン、駐米大使として重要な役割を果たす。

「日本切腹、中国介錯」～「不惜犠牲」論

4，苦しい戦争をすすめるなかで

①日本は疲弊し、多くの国民が戦禍を実感し

②日本は、財政危機に陥る

③兵力のバランスが壊れ、ソ連につけこむチャンスが訪れ、

④世界の人々も中国に同情する。

⑤香港やフィリピンの脅威を感じた英米が軍艦を派遣

⇒太平洋での戦争の機会が醸成される。

5，日本は国家挙げて自殺（「切腹」）の道を歩んでいる。

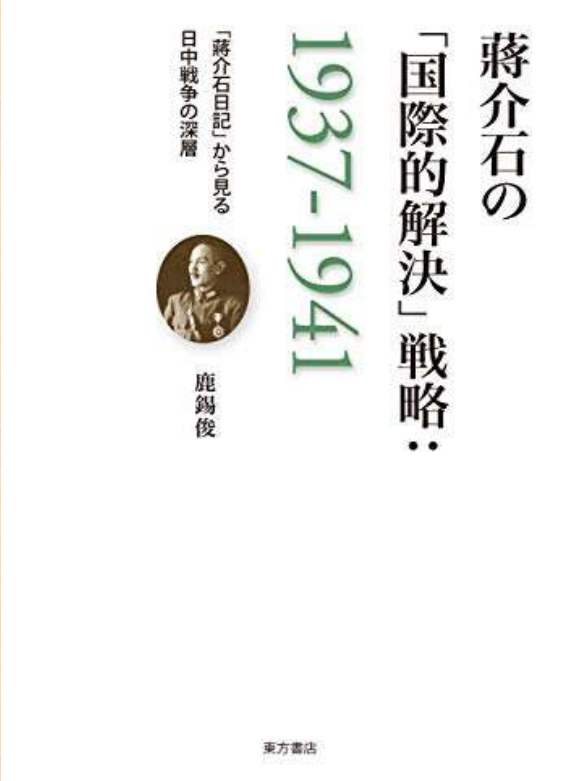
中国はその「介錯」をする役割を果たす必要がある。

⇒中国は機会を待つのではなく、自らの犠牲で機会を生み出さざるを得ない。（「不惜犠牲」）

NHKスペシャル『開戦・太平洋戦争～日中米英知られざる攻防』より

胡適が国民政府に提起した内容

①「譲歩」をしても日本の野望は止まらない
②日本に軍事力で勝つことは不可能
③勝利のためには世界戦争が必要。
④しかし他の国々が立ち上がる状況ではない。
⑤ならば、犠牲覚悟で中国が立ち上がり持久戦に持ち込む必要がある。
⑥そのなかで日本は自滅の途をあゆみ、世界各国との矛盾が激化、
⑦世界戦争が始まり、日本は敗れる。
⑧中国は自滅しつつある日本の介錯人の役割を果たさねばならない。
⇒中国側の犠牲と説得でこそ、世界戦争が実現し、日本に勝利できる。



鹿錫俊『蔣介石の「国際的解決」戦略：1937-1941』(東方書店)

国民政府の受け止め～王世杰の返書

王は政府部内で話し合った内容を返書とする・・

①「代価ある譲歩」への否定の声が強い

・譲歩をしても、日本は侵略と脅しをやめない。

⇒軍事・外交権だけでなく他の面での奴隷状態にされる

・国際正義に反す。国内分裂で国民政府も崩壊する。

②政府部内には胡適に同意する者もいるが、

日本との妥協しかないというもの(汪兆銘ら？)もいる。

③結局は蒋介石の決心による。

★蒋介石は、1935年頃から抗日の拠点としての西南部（主に四川省）の整備＝根拠地化を進めていく

(家近亮子の研究による)

王 世杰おう せいけつ
中華民国の政治家・法学者。この当時は国民政府の教育部長

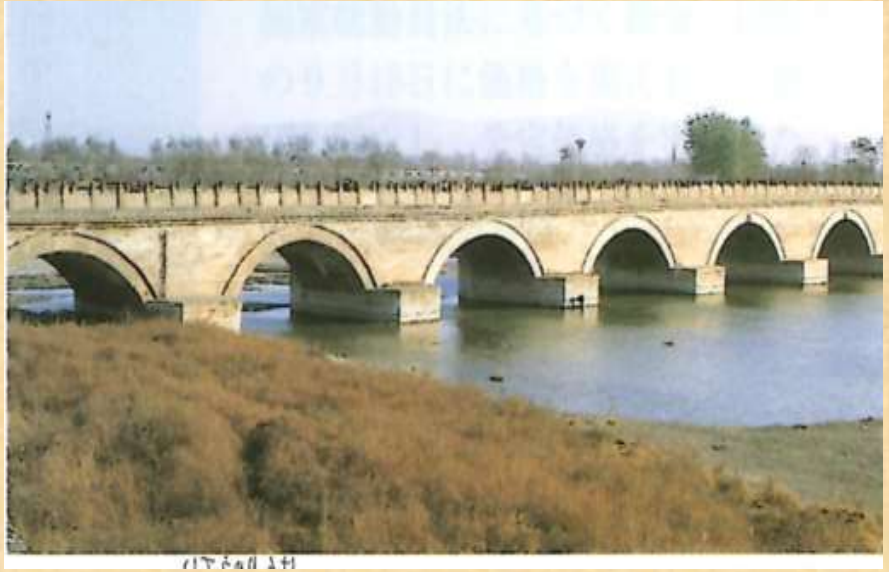
Ⅰ、日中戦争の開始と
第二次上海事変

116——抵抗する中国軍

盧溝橋事件1937,7,7

①1937（昭和12）年７月7日
北京郊外の盧溝橋付近で夜間演習中の日本軍に弾丸がとんできたことで発生した戦闘。
　これが日中全面戦争に発展する。
②日本研究者…偶発的事故でほぼ一致
③中国側研究者…日本軍謀略説が中心。
④なお、中国共産党の謀略との説もある。

⇒日中両国の間が、一触即発の状況であったことはいずれも一致している。



日中戦争の発生～盧溝橋事件

①1937年７月7日盧溝橋事件

⇒11日現地で停戦協定が結ばれる…が。

②陸軍部内…不拡大論と強硬論の対立

不拡大派：対ソ戦準備が第一

強硬派：「中国は一撃すれば屈服」と主張

③近衛文麿内閣…軍隊の増派に合意

⇒8月28日北京・天津地区総攻撃

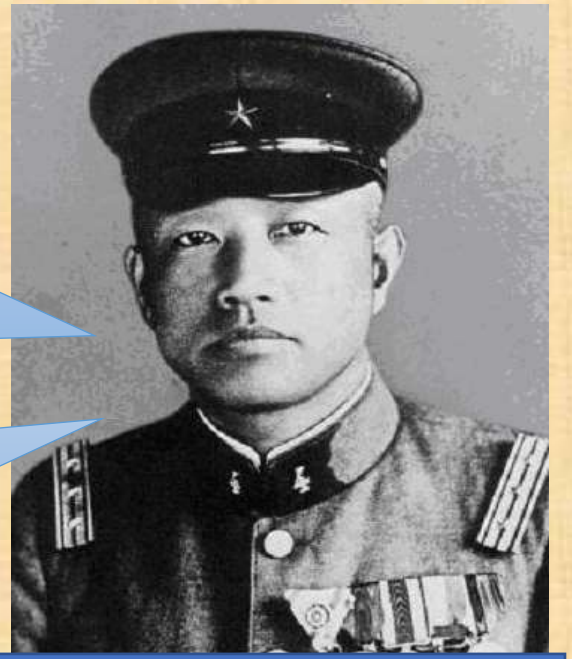
「北支事変」の開始＝限定的作戦

④８月9日、上海で大山事件発生

第二次上海事変発生

⇒戦争は中国全土に拡大

「支那事変」＝日中全面戦争へ



石原莞爾(当時の参謀本部、事実上の責任者)

困ったことになったね。満州を発展させる時期なのに

大きなごとにすべきではない。勝手なことをするな！

武藤章
(作戦課の幕僚)

面白いことになりましたね。中国をたたくチャンスですよ。

石原さん。あなたが満州でやったことじゃないですか。

暴支膺懲？明確な侵略？
～既成事実を認めるのか、否か。(入江昭)

日本側＝「暴支膺懲」＝支那軍の暴戻を膺懲する行動
…懸案解決のための武力による威嚇で戦争ですらない！
⇒「強大な一撃をくわえれば中国は屈服する」との楽観

「戦争を始めるという意思決定が行われたわけでなく
大規模な戦争に踏み込んだという自覚もなかった。」
＜入江昭『日本の外交』＞

根本的には
・満州事変以後の既成事実を前提として東アジアの政治体制を築き上げようとする日本と
・この既成事実を認めない中国の間の
衝突に他ならなかった

入江昭『日本の外交』
中公新書・1966年

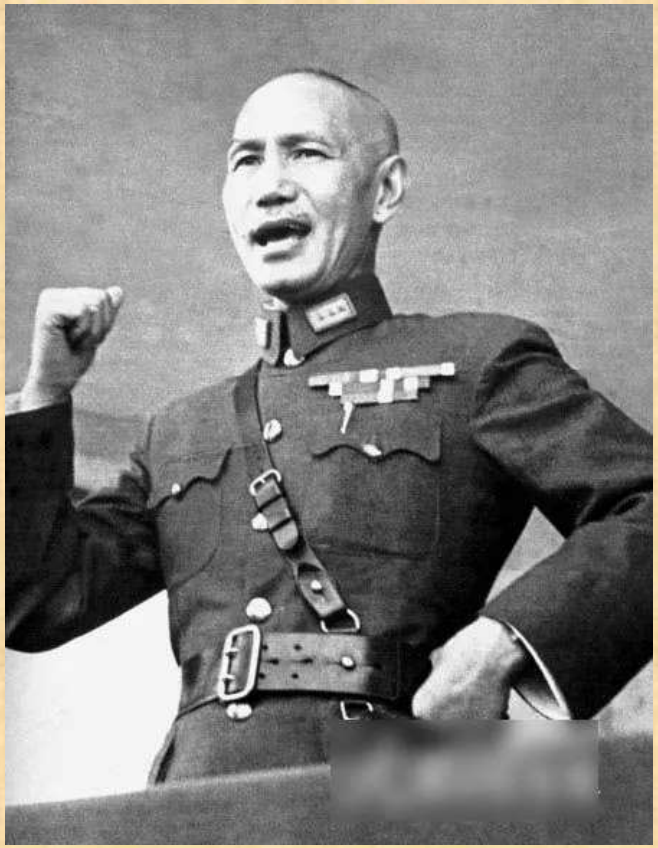
盧溝橋事件にたいする蒋介石の覚悟
1937年7月17日　盧山談話

’37/7/17 盧山談話<盧溝橋事件を受けて>

「最近数年来、吾等は忍耐に忍耐を重ね、無抵抗の態度をつゞけて来たが、これは果して何のためであつたか？

国内の安定を図り、統一を達成し、国力を充実し、最後の関頭に臨んでは即ち抗戦し、雪辱せんがためであつたのである。

今や既に平和の望みは絶えた。この時に当り、吾等としては徹底的な対日抗戦あるのみである。故に吾等は挙国一致、犠牲を惜まず日本と決戦すべきである。」



第二次上海事変の真相？NHKの番組より

「我々が上海事変（813事変）を起こしたのであり、その逆ではない。国際的な干渉を引き起こすのが狙いだった」(張発奎の証言)

⇒「上海をあえて戦場にすることで、日本の行為を広く海外に伝えようとしたという蔣介石。太平洋戦争開戦に至るまで、この極東での戦いを国際化し、大国の介入を引き出すことが、一貫した戦略の根幹でした。」(ナレ)

★笠原十九司…日中双方の謀略により発生した。大山事件は、海軍側の謀略と考える

NHKスペシャル『開戦・太平洋戦争～日中米英知られざる攻防』(2021年8月放送)

第二次上海事変
～中国による抗日戦の開始

①中国側＝周到な準備をして戦いに望む

ドイツ人顧問訓練の最精鋭部隊の投入

トーチカなどの陣地構築

航空機の投入＝爆撃計画→誤爆

②国際都市上海を舞台として選ぶ。

国際メディアを意識した対応

⇒通信料の引き下げなど

116――抵抗する中国軍

※「中国側の戦略に日本がうまく乗せられた。その戦略につかまって、非常に苦しい戦いを強いられ」た。(岩谷将)

③当初の優勢⇒ドイツ経由の日本側の和平案を拒絶

米の消極的態度で和平の斡旋はなされず

国際的関心と干渉がなければ解決できない。

～「蒋介石日記」1937/10/31～

①日本侵略は止まらず、果てしない。
② (満洲国を)承認しても対中侵略を停止する保障はない。
③日本に妥協した場合の国内混乱は想像もできない。
④中国支配以前に日本の対ソ開戦はない。
　⇒機会を待っても無駄。
⑤今次の抗日戦は回避できない。
⑥国際的な関心と各国の干渉を引き起こさなければ中日間の問題が解決できない。
⑦有利な国際情勢が生まれつつあるのは抗日戦の犠牲の効果だ。

⇒胡適が提起した方向の戦略。上海での優勢を期待したが劣勢。動揺し始める・・。

国民政府の「国際的解決」戦略
～世界に向けて中国の主張の正当性をアピール～

①国際連盟に対する提訴活動を再開し、日中衝突と中国の抗日戦に含まれた世界的意義を唱え、日中問題の国際化を促す。

②既存条約擁護を旗印にし、中国の正当性を強調しつつ、条約に違反した日本の孤立を深め、条約の履行を関係国に求める。

③国際情勢の変化すなわち英米ソら列国の対日干渉が必至であることを確信し、変化が来るまで如何なる苦難も忍んで抗日戦を堅持していく。

（p31）

⇒持久戦をつづけつつ、自らの正当性をアピール

国際情勢の変化を期待する。

鹿錫俊教授
NHKスペシャル『開戦・太平洋戦争～日中米英知られざる攻防』より

蒋介石の誤算～「国際的解決」の困難
～1937年の状況～

日中戦争の発生⇒列国が日本と開戦を覚悟するほどではない。

①8月 アメリカ…日中の斡旋に消極的→当初予定したイギリスも同調

②9月 国際連盟への提訴→不戦条約・九カ国条約違反と認定

③11月 九ヵ国条約会議→米の反対で経済制裁なし。非難のみ。

⇒世界戦争や対日干渉は起こらなかった。

アメリカをはじめ列国の対日物資輸出も止まない。

④友好国ドイツの調停に頼るが、日本の強硬姿勢に移行

⇒38～ ドイツも日本との提携に傾斜

⑤ソ連＝8月中ソ不可侵条約締結・武器資金支援（最大の援助国に）

⇒中国は参戦も期待したが…

⇒ソ連の危惧…ソ連が支援すれば、米英はいっそう傍観的に…

「書簡外交」と対米宣伝

「蒋介石は日本との衝突に備え、軍備拡充と経済発展にも力を注いでいた。そのためには、どこの国とも手を結ぶ。」

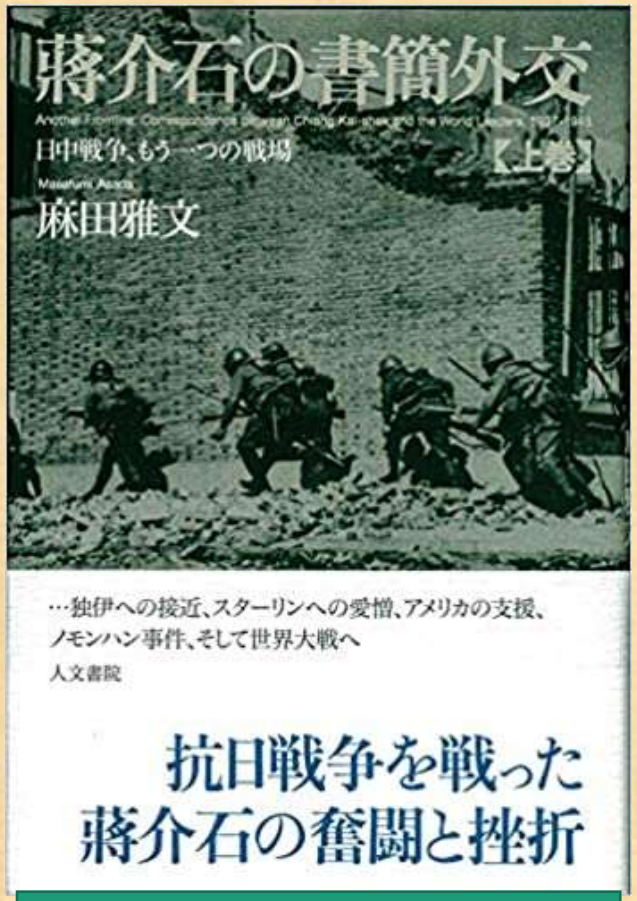
財政支援を与えたのは米英、武器を供給したのは独伊、そして政治的に接近したのがソ連

「日中戦争下、蒋介石は米英ソの指導者たちと多くの書簡を交わした。中国の存立を賭けた決戦下で、各国首脳との往復書簡は、もう一つの戦場であった」

（麻田雅文『蒋介石の書簡外交』オビ）

◎アメリカなどでの宣伝活動の実施

- 胡適米大使⇒スティムソン委員会の活動への援助
- 宋美齢のアメリカ遊説



浅田雅文『蒋介石の初刊外交(上)(下）』

ドイツの苦悩～日中双方の友好国

①ドイツ 1921 中国にとっては初の平等条約を締結
⇒以後、良好な国際関係樹立
※蒋介石…ファシズムとヒトラーへの傾倒?!
1936中独同盟締結…大量の借款・武器輸出と希少金属交換
36 ドイツ武器輸出総額の57．5%は中国（日本は1%）
独軍事顧問による対日戦準備⇒上海の陣地構築の指導など
②1936 日独防共協定…ソ連を仮想敵とした内容
⇒1937年にはイタリアも参加（三国防共協定）
③日中戦争の開始⇒ドイツ・イタリア調停に積極的
⇒駐中大使トラウトマン工作の開始
日本：調停案の伝達を依頼、調停に

三国防共協定の締結
（1937）

和平は可能だった?!トラウトマン工作

上海での激戦→優勢→11/上海陥落・南京攻略戦→12/南京陥落へ

①37/10 日本：支那事変対処要項決定⇒独に斡旋を依頼

満州国承諾・非武装地帯設置・日中防共協定・華北での合弁事業など

②11/ 独：トラウトマン工作…両国と友好関係・早期和平を期待

③蒋介石：九カ国会議に期待、いったん拒否したが・・

華北・上海の軍事的敗北、列強の日本への宥和的対応

⇒領土保全を条件に要求受諾を打診＝蒋介石動揺?!

⇒ 12月 ドイツ、日本に「覚書」提出

④12日本側、一転、強硬論へ

広田外相…「このような軽易な条件では容認しがたい」

⇒杉山陸相・米内海相・近衛首相も同意

参謀本部…緩い条件での講和を主張するが、孤立

広田弘毅(1878～1948)
元首相・外相、東京裁判で処刑される

第一次近衛声明「国民政府を対手とせず」

1937/12南京陥落　＝日本政府、一転強硬論へ

①大本営会議⇒広田・海軍ら和平条件を強硬に

現地軍⇒既成事実で和平工作を妨害

⇒参謀本部の孤立、中国・ドイツ失望

②38年1月第一次近衛声明

「帝国政府ハ爾後国民政府ヲ対手トセズ」

和平工作打切り、中国との外交関係を遮断

⇒中国側を硬化させる→和平を困難に

③38年 中国側の軍事的劣勢（～10月 武漢・広東陥落）

・国民政府内部の動揺・蒋介石の葛藤も高まるが

・ 日本：親日政権樹立を画策＝汪兆銘工作へ

爾後國府對手とせず

新興政權と國交調整

政府重大聲明を發表

帝國不動の對支方針を中外に闡明すべき歴史的重大聲明は十六日正午内閣より發表された、その全文は左の通りである

【帝國政府聲明】帝國政府は南京攻略後引續き支那國民政府の反省に最後の機會を與へるため今日に及べり、然るに國民政府は帝國の誠意を解せざるばかりに抗戰を策し内民人命財産の苦みを顧みず外交信義の和平を説みる所なし仍て帝國政府は爾後國民政府を對手とせず帝國と眞に提携するに足る新興支那政權の成立發展を期待し是と國交を調整して東亞新秩序の建設に協力せんとす、そもそも帝國が支那の獨立及主權並に在支權益の尊重を標榜するの方針には變もかはる所なし、今や東亞和平に對する帝國の責任愈々重し、政府は國民が此の重大なる任務遂行のため一層の發奮を期待して止まず

Ⅱ、日中戦争と世界
道義的支援から実質的支援に

ファシズム諸国の台頭＝新秩序要求に

①ファシズムの台頭…伊：22/ファシスト党・独：33/ナチス党

1)独：ヒトラー政権＝東方帝国建設をめざす⇒東欧ソ連方面へ

38～39オーストリア・チェコスロバキア・ポーランド侵略

⇒ソ連の強い危機意識⇒日本の動きに敏感・中国抗日戦に期待

2)伊：ムッソリーニ政権…地中海帝国　35 エチオピア侵攻

3)日本…東亜新秩序を宣言(1937)⇒大東亜新秩序へ

1931～満州事変　1937～日中戦争　1939ノモンハン戦争

②支配権の拡大＝新たな世界秩序建設を要求

「持たざる国」：人口過剰・資源確保などの生存権獲得を主張

「旧秩序」＝ベルサイユ＝ワシントン体制打破をめざす。

⇒英・仏・米などに「持てる国」中心の世界秩序に挑戦

③反ソ・反共で結合＝1936日独防共協定⇒1937三国防共協定

⇒新国際秩序建設…反米英での結合をめざす

ファシズム諸国と各国の対応

ファシズム諸国＝旧体制に反発＝世界新秩序建設を要求

⇒国際社会とくに旧体制（英・仏・米）の対応

①宥和政策の展開…ある程度の領土・支配権の変更を容認

⇒1938 ミュンヘン会談　（1931～37 中国侵略に対する対日政策）

背景：同じ帝国主義国としての利害の共通性・共感

反共主義に期待（⇒独ソ間の戦争を期待）

②集団的安全保障＝国際連盟による共同制裁・民主主義国の結合

・危機感の共有＝米・英・仏の接近、さらにはソ連も

★ソ連：1934国際連盟加入⇒1935反ファシズム統一戦線主張

→宥和政策に反発し、独自の安全保障政策展開

1939 独ソ不可侵条約⇒ポーランド侵攻　1941 日ソ中立条約

最大の援助国・ソ連

日本軍を中国戦線に釘付けにすることを期待

①37/8 中ソ不可侵条約締結・大量の軍事経済援助

②日本陸軍の最大の仮想敵・本来の軍事目標

⇒参謀本部などの日中和平要求の背景

③ソ満国境において日ソ両軍が対峙

1)38/7～8 張鼓峰事件

2)39/5～8 ノモンハン事件

④日中戦争＝日本軍の本格的な侵攻を不可能に

⇒ヨーロッパにおける対ドイツ戦略に注力

⑤蒋介石…ソ連の対日参戦を熱望するが…

「鹿錫俊は『日ソ開戦幻想』と名付けた」(麻田)

ソ連の対中援助

①のべ２億数千万ドルの借款②大量の武器弾薬の供給

・飛行機924機
・自動車　1516台
・大砲　1140台
・機関銃　9720丁

③人員提供
2000人以上のパイロットなど

④援助ルート
⇒新疆ウイグル経由
⇒海上…仏印経由

イギリス：ヨーロッパ情勢を最優先に
～宥和政策とアジアでのアメリカ依存～

①市場・権益保護やワシントン体制の維持に重点
　⇒警告・抗議を発し、日中間の調停も模索するが

②ヨーロッパにおける対独政策優先
　38/9　ミュンヘン会談＝対独宥和政策をとる
　ファシズム国家を包含した国際秩序を模索
　⇒ソ連の反発＝独ソ接近へ

③アジア…アメリカとの協調・依存の姿勢に
　⇒アメリカの強硬論をうけ対立姿勢を強めるが。

④日本の強硬姿勢・欧州情勢⇒譲歩を迫られる
　1)39/6～7 天津・英仏租界の封鎖⇒屈服
　2)40/6～9 援蒋ルート・ビルマルート閉鎖

ミュンヘン会談1938/9
チェコスロバキアのズデーテン問題に関する独・伊・英・仏首脳会談。英・仏はナチスドイツ宥和政策をとり、ソ連の英仏への不信感を高めた。

アメリカ～道義的支持と消極姿勢
～孤立主義と国内政治優先～

①議会の孤立主義と恐慌対策重視を背景に
当初は日中戦争へは消極的姿勢

・「隔離宣言」37/10→国内の支持得られず

・日中間の調停や九カ国条約会議でも消極姿勢

中立法（35⇒37/5）交戦国への兵器類の禁輸・輸出制限

②37/12 パネー号事件・南京虐殺事件など
⇒英との共同行動を強化＝軍事協議開始。
⇒38年経済被害についての抗議をつづける

③38/11 第二次近衛声明「東亜新秩序建設」
⇒実質的な制日援中へ転換

フランクリン＝ローズヴェルト
（1882～1945）
第32代米大統領・民主党

「東亜新秩序」建設～第二次近衛声明とその波紋

①38/10 武漢・広東陥落⇒日本の攻勢、手詰まり状態に

⇒国民政府・重慶を拠点に徹底抗戦体制に移行＝泥沼化

② 第二次近衛声明＝「東亜新秩序」建設を主張

近衛三原則＝日満「支」の善隣友好・共同防共・経済提携

「支那の処理の鍵は日本の手中にある」⇒中国独占の意志

・天津条約(1858)以来の列強の権益を否定する性格

・ナチスドイツ「欧州における新秩序建設」と呼応

⇒既存のアジア秩序の否定・挑戦の性格をもつ。

③38/12 汪兆銘重慶脱出→「東亜新秩序」受諾を表明

←諸外国による中国援助は不可能と判断

④英米仏…近衛声明・汪兆銘「政府」不承認を声明

汪兆銘（1883～1944)孫文の側近、蒋介石と並ぶ中国国民党の指導者。1938年重慶を脱出、日本側と接触、1940年日本の傀儡政権を樹立。

日中戦争の国際化＝米英仏との対立の激化

①日中戦争の激化→戦争遂行上、各国の権益を毀損
　日本国内における欧米排除を主張する声の高まり
　　⇒第三国に対する在中権益侵害の多発

②第二次近衛声明＝「東亜新秩序建設」
　従来の秩序＝権益の否定明確に・ドイツに接近

③米英など、実質的な制日援中に踏み切る
　　対中経済借款設定・航空機・部品輸出禁止
　　⇔日本側：39/6～7 天津・英仏租界の封鎖
　対日制裁と中国援助の本格化
　＝日中通商航海条約の廃棄通告(39/7)

④列強からの援助物資輸送(援蒋ルート）が本格化

Ⅲ、三国同盟加盟問題と第二次大戦の発生

ドイツの対日接近＝米英ソへの牽制を期待

①ドイツの日本接近⇒中国援助の中止・満州国承認
　＝防共協定の強化＝同盟化を期待（⇒三国同盟へ）
日本の勢力拡大⇒英ソへの牽制効果を期待

②日本内部の親独派の活動活発化…大島浩・白鳥敏夫ら
「持たざる国」結束＝英米と対決・「新秩序」を主張

③近衛内閣の欧米へのあいまいな姿勢
1)対ソ＝防共協定には積極的
2)海軍・外務省主流派の反対＝対英米方針には反対
3)「欧州新秩序」に親近感⇒38/11「東亜新秩序建設」声明

☆1940年には再び日中戦争への調停を打診⇒中国が拒否

アドルフ＝ヒトラー

戦争の泥沼化＝「点と線」の支配(38～)

①戦争、「持久戦」へ（「泥沼化」）

徐州作戦(38/5)・武漢作戦(38/10)以後、
戦線のさらなる拡大は困難に⇒戦線の整理
「治安地域」…華北の平原部、長江下流三角地帯
「作戦地域」＝抗日勢力壊滅→海南島占領・南昌攻略

②「点と線」の支配＝都市と鉄道・主要道路の支配
⇒広大な「面」(農村)は支配できない

③日本軍「二つの戦場」でのたたかいを強いられる
対国民党：正規軍同士のたたかい＝華中・華南
対共産党：治安地域などに根拠地建設⇒ゲリラ戦展開
40/8～百団大戦⇒燼滅作戦展開

★中国軍同士の戦闘も⇒新四軍(共産党軍)への攻撃

日本軍占領地と抗日根拠地
5億人の中国人が抗日意識を持ち続けている以上、100万の日本軍で支配することは実際には不可能であった。

治安戦＝「燼滅作戦」（三光作戦）の実施

①燼滅じんめつ作戦…「敵根拠地を燼滅掃討し敵をして将来生存するあたわざるにいたらしむる」（1940）

1)「土民を仮装する敵」や「敵性があると認められる15才以上60才までの男子」を殺戮

2)「敵性部落」の「焼却破壊」

⇒「生け捕るべき必要ある男女まで殺した」との反省

②1)担当地域を三ランクに分け「未治安地区」への掃討を強化

2)遮断線の構築、「無人区」「集家併村」

⇒村を焼き払い、「人囲い」に強制移住させる

③掃討作戦の中で…大量の毒ガスの使用

中国帰還者連絡会編『三光』
三光とは「奪い尽くし（「略光」）、焼き尽くし（焼光」）、殺し尽くす（「殺光」）」ことをさす。

三国同盟をめぐる対立激化

①中国の戦局の泥沼化⇒自力での解決が困難に
　ソ連や英国が中国を援助しているから?!
　⇒この援助を停止させるためには…。
②日独伊三国軍事同盟論…陸軍・外務省革新官僚
　ドイツと結び、欧州からソ・英を牽制する！
　⇔慎重派…海軍・外務省主流派
　　対米英同盟の性格とならないか慎重
　　米国依存の経済・占領地の経済政策への協力も
③対英強硬策…天津のイギリス租界封鎖⇒屈服させる
　　⇔米の反発＝強硬策の実施を招く
④独ソ不可侵条約(39/8)＝「三国同盟」論の挫折
　　⇒平沼内閣崩壊「欧州情勢奇々怪々」

平沼騏一郎
(1867～1952)
第３５代総理大臣
法務官僚出身

ソ連との衝突～ノモンハン戦争

①関東軍：シベリア侵攻の機会を狙う（北進論）

ソ連、日本への強い警戒心→中国援助の背景

⇒ソ「満」国境において日ソ両軍が対峙

②38/7～8 張鼓峰事件

⇒沿海州の国境地帯への日本軍による威力偵察

③39/5～8 ノモンハン戦争（事件）

・関東軍（服部・辻参謀ら）の独走による大規模衝突

・ソ連：日本軍に圧倒、抗戦意欲を奪おうとする。

⇒関東軍の大惨敗＝一個師団壊滅など

39/9 休戦協定締結

＋/8 独ソ不可侵条約⇒/9 第二次大戦勃発

⇒ソ連との対立回避＝北進論の退潮へ

辻政信参謀

第二次世界大戦の発生(1939年9月1日)

①1933 ナチス・ドイツ政権成立

1935 再軍備宣言⇒ベルサイユ体制へ挑戦

1938 東方拡大を本格化

オーストリア併合・ミュンヘン会談

＝チェコスロバキア解体

独ソ不可侵条約（＋秘密協定）締結

②1939/9 独ソのポーランド侵攻

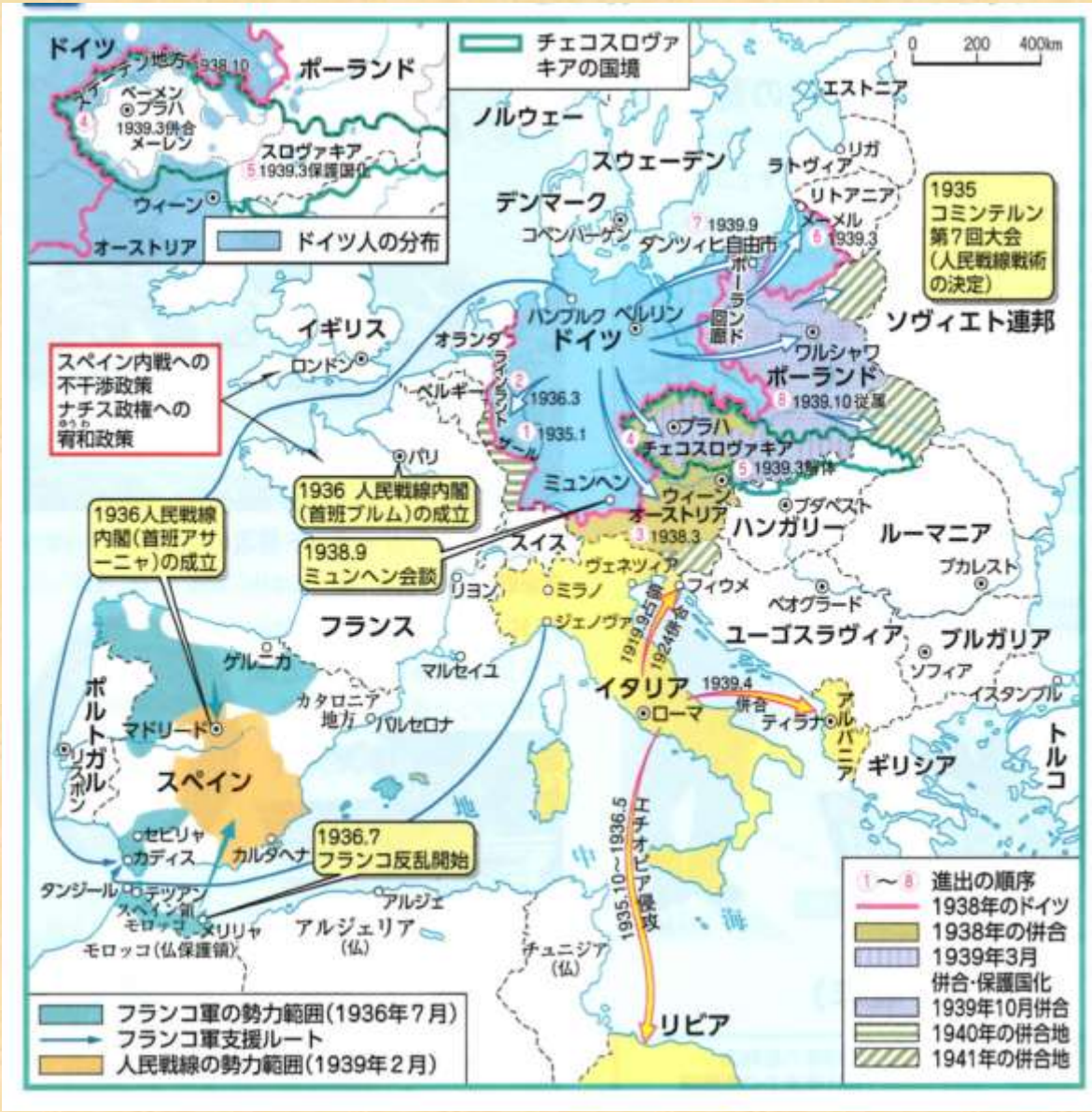
ソ連・ポーランド東部領内に侵入、分割

英仏の対独宣戦（第二次世界大戦発生）

③～40/4「奇妙な戦争」

★ソ連…フィンランド戦争⇒連盟除名に

④40/4～ ドイツ大攻勢の開始



阿部・米内内閣～不介入政策（39/9～40/7）

阿部信行・米内光政内閣＝海軍「穏健派」・短命

①欧州戦争不介入政策＝米英との対立を懸念

「奇妙な戦争」(39/9～40/4)・独ソ接近に対応

②中国への援助への圧力拡大

1)仏・英に圧力をかけ、援蒋ルートの封鎖実現

2)ソ連との提携を模索＝中国援助の中止を期待

←ノモンハンの敗北・独ソ連携

3)三国同盟論復活、ソをも加えた反英米同盟結成も

③40/4～ドイツの快進撃・イギリス猛爆撃に

⇒「バスに乗り遅れるな」論・新体制運動の活発化

⇒40/7 陸軍の工作により米内内閣崩壊

米内光政（1880～1948）第37代首相
海軍穏健派（米英派）、
三国同盟には否定的な
の姿勢を見せた。

Ⅳ，三国同盟締結と南進論

独伊の欧州大陸支配と英米の一体化

①1939/9 第二次世界大戦開始

～40/4「奇妙な戦争」

②40/4～7独の大攻勢・/4イタリア参戦

デンマーク・ノルウェー/ オランダ・ ベル ギー

・フランス侵入・降伏⇒傀儡政権の成立

⇒枢軸国による欧州大陸支配実現

③イギリスの孤立⇒独の大爆撃(/7～/12)

・仏・蘭などの亡命政権の成立

④アメリカの対英援助の本格化

「民主主義の兵器廠」「四つの自由」

40/9 選抜徴兵制 41/3 武器貸与法

⇒ 41/8 大西洋憲章発表

蒋介石、最大の試練　1940年夏

①第二次大戦…英仏側での参戦を検討（「二つの同時」論）
②ドイツの大攻勢⇒援蒋ルートの閉鎖
　6月仏印ルート・7月ビルマルート・宜昌陥落
③ドイツ勝利の予想⇒国民党内の意見対立
　「棄英・連ソ・連独」「英・米・仏」「両全方針」の並立
④日本との和平工作の実施＝最低条件確保した上での交渉

⑤8月 共産党による百団大戦の開始(～12)＝第二戦線の成立
⑥9月 日独伊三国同盟締結⇒米の対中援助の拡大
　　⇒10月 イギリス・ビルマルート再開
⑦11月汪兆銘政権との条約締結⇒和平工作の挫折

アメリカの危機感の高まり
＝英との一体化へ

①最大の危惧：イギリスの敗北とナチス中心の新国際秩序建設

欧州とのつながりを失う＝アメリカ孤立化の危機

1)イギリス援助の強化→中立法改正・武器貸与法・大西洋憲章

2)独ソ戦(1941～）後は、対ソ支援も本格化

②日本の中国・アジア支配(大東亜新秩序)に対抗⇒従属的位置づけ

1)国民党にたいする支援＝援助の強化、不平等条約の撤廃

2)日独接近(三国同盟)によるファシズムの世界支配を警戒

3)日本の南方進出⇒国際秩序の解体阻止へ

フィリピンへの脅威

4) 日本との経済的つながり⇒貿易制限・経済制裁の強化

39通商航海条約破棄⇒経済制裁（許可制⇒禁輸＝ガソリン・屑鉄）

5)海軍のハワイ真珠湾集結

南進論の高まりと三国同盟

①南進論…東南アジアなど南方進出をめざす。
　主に海軍の主張⇔北進論：陸軍/満州シベリア

②南進論の萌芽…19世紀末以降台湾領有や南洋群島獲得により本格化。経済進出に重点。

③1936/8 「国策の基準」⇒国策化。

④英米との対立の深刻化＝供給の停止の危惧
　⇒石油など資源目的の南進強調

⑤独伊と結び(三国同盟)英蘭仏植民地を獲得
　⇒大東亜共栄圏樹立＝世界の4ブロック化
　　独伊＝欧州、日＝アジア、米、ソ

ドイツ電撃作戦と「バスに乗り遅れるな」論

①40/4～ドイツ快進撃…仏・蘭などの降伏・対英攻勢

⇒各国のアジア植民地の帰趨が課題に

1)早期の大戦終結⇒ドイツ獲得へ?!

ドイツと結べば日本が獲得（大東亜共栄圏樹立に）

2）アメリカとの関係悪化＝天然資源確保の課題

とくに蘭印（現：インドネシア）の石油獲得への期待

3) 仏印・ビルマ経由の対中補給路切断と中国侵攻

(⇒40/7～9 英：ビルマルート閉鎖に同意)

②三国同盟への期待…「持たざる国」による新秩序

欧州新秩序と大東亜新秩序の結合

☆ドイツ…アメリカ対独参戦への牽制を期待

第二次近衛内閣成立(40/7)

①第二次近衛内閣（40/7～41/7）

外相：松岡洋右・陸相：東条英機

②新体制の構築⇒大政翼賛会設立へ

③南進論の確認＝大東亜新秩序建築

日中戦争がどうであっても「南方問題解決のために武力行使」を確認(40/7)

⇒北部仏印進駐（40/9）

④松岡外交の展開

アメリカを牽制し、対日政策変更による日米の衝突回避＝関係改善をめざす。

1)日独伊三国同盟の締結

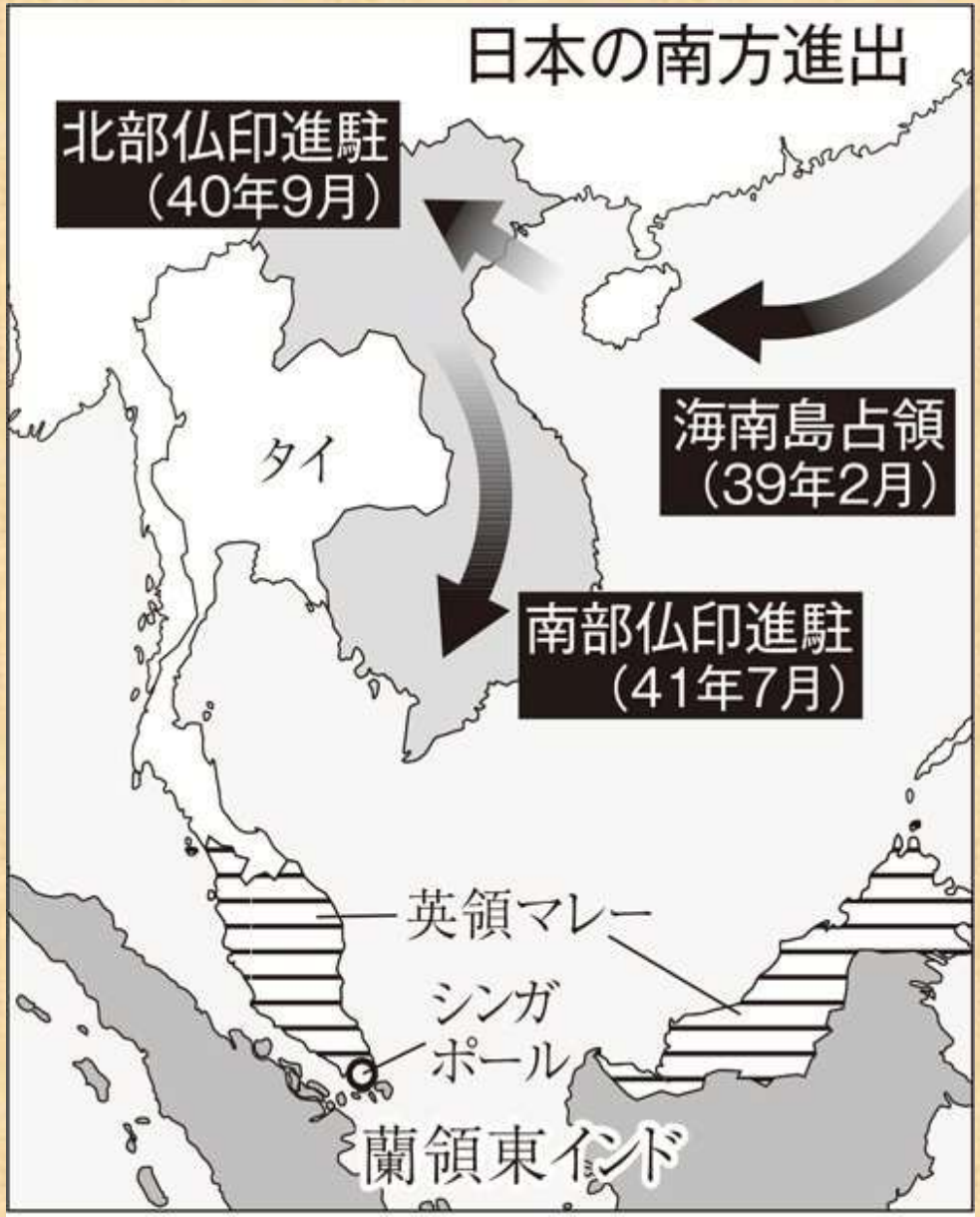
2) ソ連との関係改善⇒日ソ中立条約締結

第二次近衛文麿内閣

二列目に東条陸相・松岡外相の姿が見える

北部仏印進駐（41/9）

①仏印＝フランス領インドシナ
②フランス降伏＝ビシー傀儡政権の成立
　⇒ビシー政権を「援助」を口実に、
　フランスの主権尊重を条件に進駐を強行
③目的
　1)援蒋(仏印)ルートの切断
　　⇒中国侵攻の拠点
　2)石炭などの資源獲得をめざす
　3)「南進」の拠点の確保
　⇒フランス植民地軍との衝突も
④「南進」＝東南アジア進出の開始
　アメリカの反発⇒9月くず鉄の輸出禁止



日独伊三国同盟（40/9/27）

第一条　日本国は、独逸国及伊太利国の欧州に於ける新秩序に関し、指導的地位を認め且之を尊重す。

第二条　独逸国及伊太利国は、日本の大東亜に於ける新秩序建設に関し、指導的地位を認め且之を尊重す。

第三条　日本国、独逸国及伊太利国は、前記の方針に基く努力に付相互に協力すへきことを約す。更に三締約国中何れか一国か、現に欧州戦争又は日支紛争に参入し居らさる一国に依て攻撃せられたるときは、三国は有らゆる政治的、経済的及軍事的方法に依り相互に援助すへきことを約す。

（中略）

第五条　日本国、独逸国及伊太利国は前記諸条項か三締約国の各と『ソヴィエト』聯邦との間に現存する政治的状態に何等の影響をも及ほささるものなることを確認す

日独伊三国条約の意味

①アメリカを対象とし軍事同盟・協力関係を作り上げる

松岡は「局外に立っていたアメリカを牽制し、さらには親善関係に引き込んで日中間の調停にあたらせ ることができると考えていた」(木畑洋一)

②アジア＝日本、欧州＝独・伊
の優越的地位を相互承認

③外務省は積極的に、海軍首脳は消極的
⇒自動的参戦規定ははずす

④民主主義国vs反民主主義国の構図明確に

「ドイツと死闘を繰り広げていた英仏ならびにその背後にたって支援を惜しまないアメリカとの対立は決定的となった」（臼井勝美）

日ソ中立同盟と中国

①40/9三国軍事同盟締結　⇒米英対象、米参戦阻止

・三国同盟にソ連を加えた四国同盟をめざす

⇒ドイツの消極的態度⇒41/4 日ソ中立条約を締結

日本：北方の安定⇒南進政策を強化・中国への圧力増大

ソ連：独ソ戦の準備（←独のバルカン作戦の進行の成功）

②中国の衝撃…ソ連への失望・反発

ソ「満」国境の安定⇒中国への軍事的圧力増大

ソ連の満州国・日本の外モンゴル承認

アメリカの援助拡大＝「武器貸与法」制定(41/3)

イギリス対象だが軍需物資の支援・援蒋ルートの

インフラ整備、航空機・パイロットにも適用

松岡洋右（1880～1946）
外交官・政治家。第2次近衛内閣の外相。日独伊三国同盟や日ソ中立条約締結を推進。A級戦犯

Ⅴ、アジア太平洋戦争開戦へ

独ソ戦開始と御前会議

①41/6 ドイツ軍、突如ソ連領へ侵攻（独ソ戦の開始）

②戦争の世界規模での一体化

中:米の支援下に中英ソとの「大同盟」を提案・英も協力的

日本のソ連侵攻をも期待

松岡外相⇒即時対独開戦を主張

③7月2日御前会議開催＝「情勢の推移に伴う帝国国策要綱」

1) 対英米戦準備を整え、まず仏印及びタイへの方策を完遂

⇒「帝国は本号目的達成のため対英米戦を辞せず」

2）独「ソ」戦争が有利に進展すれば

⇒「武力を行使して北方問題を」解決し北辺の安定を確保す。

関特演と南部仏印進駐

①7月2日御前会議開催
　＝陸軍と海軍、北進論と南進論の調整
②関東軍特種演習（関特演）の実施
　軍隊（50万・16個師）を国境に結集
　　→シベリア進出も可能に
ドイツの進行速度の遅さ⇒8/ シベリア侵攻中止に
☆ソ連軍の西送を可能に
　⇒ドイツの侵攻を食い止めることに（12/8）
③南部仏印（＝ベトナム南部）への進駐の決定
⇒7月27日　陸海軍部隊、南部仏印への進駐開始
シンガポール・インドネシア・フィリピンへ爆撃可能に
⇒アメリカ、決定的な経済制裁を実施

南部仏印進駐（1941年，サイゴン市内）

「石油禁輸」＝総力戦下の「開戦」

①米の経済制裁＝対日開戦を覚悟か？

対日資産凍結（7/26）・石油の全面禁輸(8/1)

英・蘭(亡命政府→蘭印に影響を維持)も追随

⇒ABCD包囲網の形成

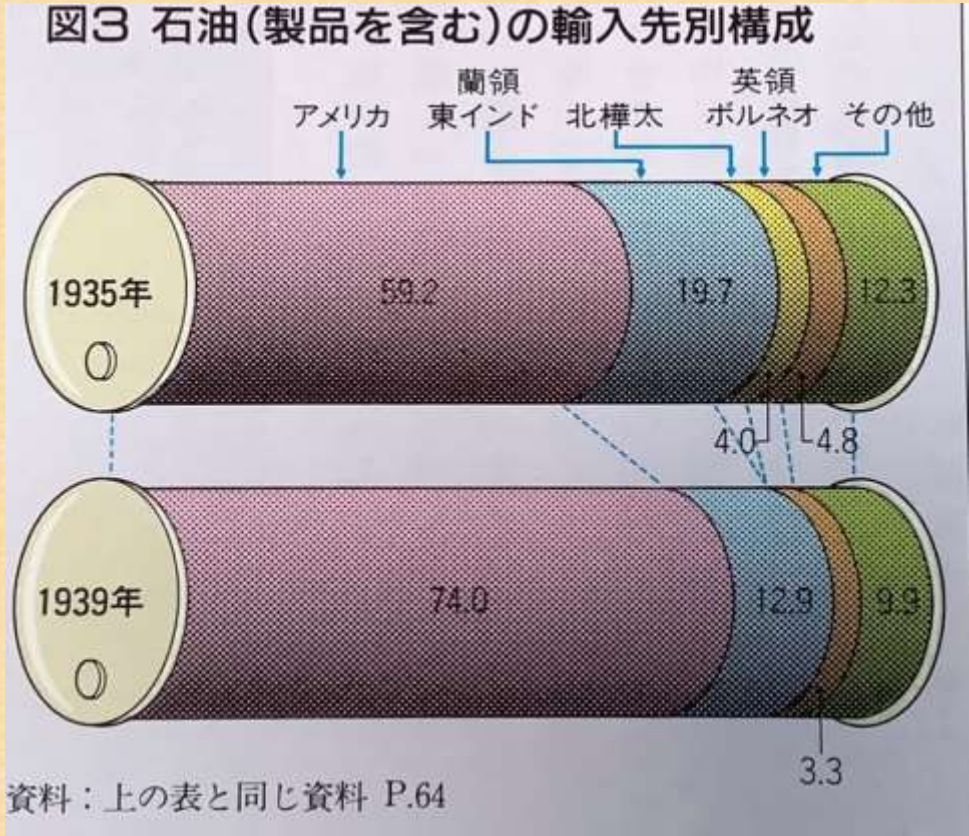
→石油備蓄量というタイムリミット

②石油禁輸＝開戦か、妥協かの選択に

1)日米交渉本格化し妥協による石油禁輸解除をめざすか、

2)開戦＝石油資源獲得のため蘭印など東南アジア進出か

ABCD包囲網
A:アメリカ、B:イギリス、
C:中国、D：オランダ



日米交渉の本格化

41/4　日米交渉再開・本格化

（野村・来栖大使vsハル国務長官）

①米側(←背後には世界とくに中国が存在)

1)仏印からの撤退、2)中国からの撤兵、

3)三国同盟の無効化　を要求

→軍備が整うまでの時間かせぎとの指摘も

②日本側…7月以降石油禁輸解除が絶対条件に

1)勝利の展望は皆無。

2)1937年以降の「戦果」をすてられるか？

3)妥協は「敗北」という「メンツ」

←国内の反発

ハル国務長官(中央)と共にホワイトハウスに向う野村大使(左)と来栖大使(右) 1941(昭和16)年11月17日

開戦の方針決定に＝9月の御前会議

①勝利への展望をもつものは皆無、だが

②はじめるなら、可能性があるなら今！との議論が

1)現状の太平洋の艦隊・航空機の割合では日本がやや優勢

2)米は急激に戦力を増強中→逆転は時間の問題

⇒ムリを重ねての日本、準備不十分のアメリカ！

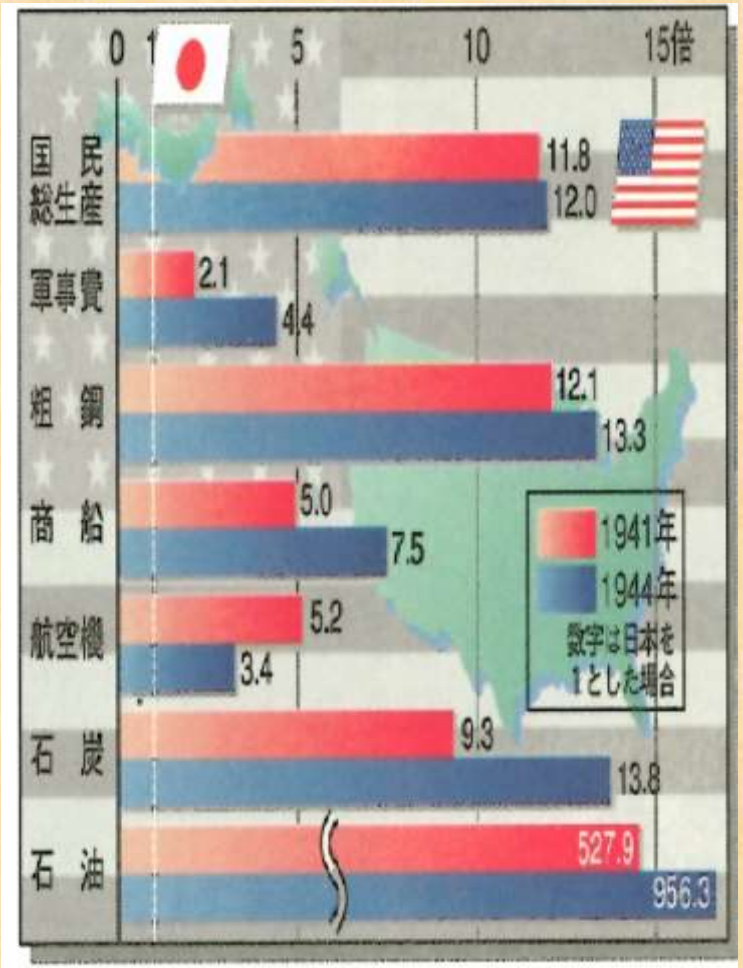
③9月6日御前会議＝開戦の方針を決定

「帝国国策遂行要領」

「10月下旬まで」と期限を切って日米交渉継続

→不調時は開戦へ

⇒天皇は消極的姿勢、海軍は沈黙、近衛は積極的に発言しない



日本とアメリカの国力

第三次近衛文麿内閣総辞職　(41/10)

①タイムリミットが近づく中で

1)近衛…交渉継続・日米首脳会議実施を望む

　日米首脳会議開催⇒中国撤兵やむなしで決着をめざす

2)陸軍(東条ら)…交渉打ち切り、開戦決意を要求

　中国撤兵を断固拒否⇒満州事変以来の失敗を認める事に…

3)海軍…勝つ自信はなし。「近衛がいいだせば賛成する」

・これまで対米戦にむけての軍備を要求してきた立場上…

・太平洋の艦隊・航空機の割合では日本がやや優勢との観測

②近衛内閣、内閣不統一を理由に総辞職(10/16)

東条英機内閣成立（41/10）

①東条…首相に東久邇宮稔彦王を推薦

②木戸内大臣、これを拒否し開戦派の東条を推薦

「陸軍を抑えられるのは東条しかいない！」（木戸）

「虎穴に入らずんば虎児を得ずだね」(昭和天皇)

③東条英機内閣成立

国家・天皇に責任を負う首相としての東条として

1)条件：9月の開戦決定を白紙撤回、再検討を命じる

2)東条…開戦慎重派の東郷茂徳・賀屋興宣を入閣させる

→天皇の期待に応えようとするが、陸軍の声も

3)企画院などに国力分析を命じる

⇒開戦に向け数字などを改竄？希望的観測？

④アメリカ…日本は開戦を決意した!と認識

東条英機（1884～1948）東京生まれ。関東軍参謀長・陸相を経て、1941年首相。内相・陸相を兼任し、太平洋戦争開戦の最高責任者となったが、戦況不利となった同19年総辞職。戦後、極東国際軍事裁判でA級戦犯とされ、絞首刑。

開戦の御前会議へ(41年11月)

①11/5、御前会議＝再検討の結果報告

1)9月の御前会議の再確認(交渉不調なら開戦)

2)12/1をリミットに

←石油備蓄量と気候条件を勘案

3)各部隊に開戦準備にとりかかることを命令

4)最終交渉案提出(甲・乙案) 決定

②「戦争の大義」をめぐる「珍」問答

③戦闘計画がないままの開戦決定

「対英米蘭蒋戦争 終末促進に関する腹案」

⇒11/15提出

御前会議の構成員

天皇

首相・国務大臣・枢密院議長・枢密顧問官・元老・内大臣・参謀総長・参謀次長・軍令部総長・軍令部次長

「暫定協定案」の攻防とハルノート

①11/20 日本最終提案「乙案」提示
　中国問題の棚上げ・41年6月時点での現状凍結
②米「暫定協定案」⇒各国に提示・時間稼ぎが目的
　南部仏印撤退・北部兵力2.5万⇒米：民需用石油供給
③中国⇒猛烈な抗議「アメリカ・民主主義への信頼を失う」
　⇒英：中国に配慮し反対＝「暫定協定案」取り下げへ
④11/26日本に対する米の回答（いわゆる「ハルノート」）
・中国・インドシナからの一切の兵力・警察力の撤収
・重慶国民政府以外、いかなる政府・政権にも支持を与えない
・米英は中国におけるすべての権益および治外法権を放棄すべき
⇒米は中国問題について徹底的に対立する立場を表明した

ハル国務長官

対米英開戦

①アメリカ…11/26「ハルノート」を提出

中国からの無条件撤退＋満州事変以前への復帰　を要求

⇒日本側はこれをアメリカの最終回答とみなす。

②12/1御前会議

→対米英蘭戦開戦を決定、各部隊に通知

④12/8陸軍部隊のコタバル奇襲上陸

海軍航空機隊ハワイ真珠湾奇襲攻撃

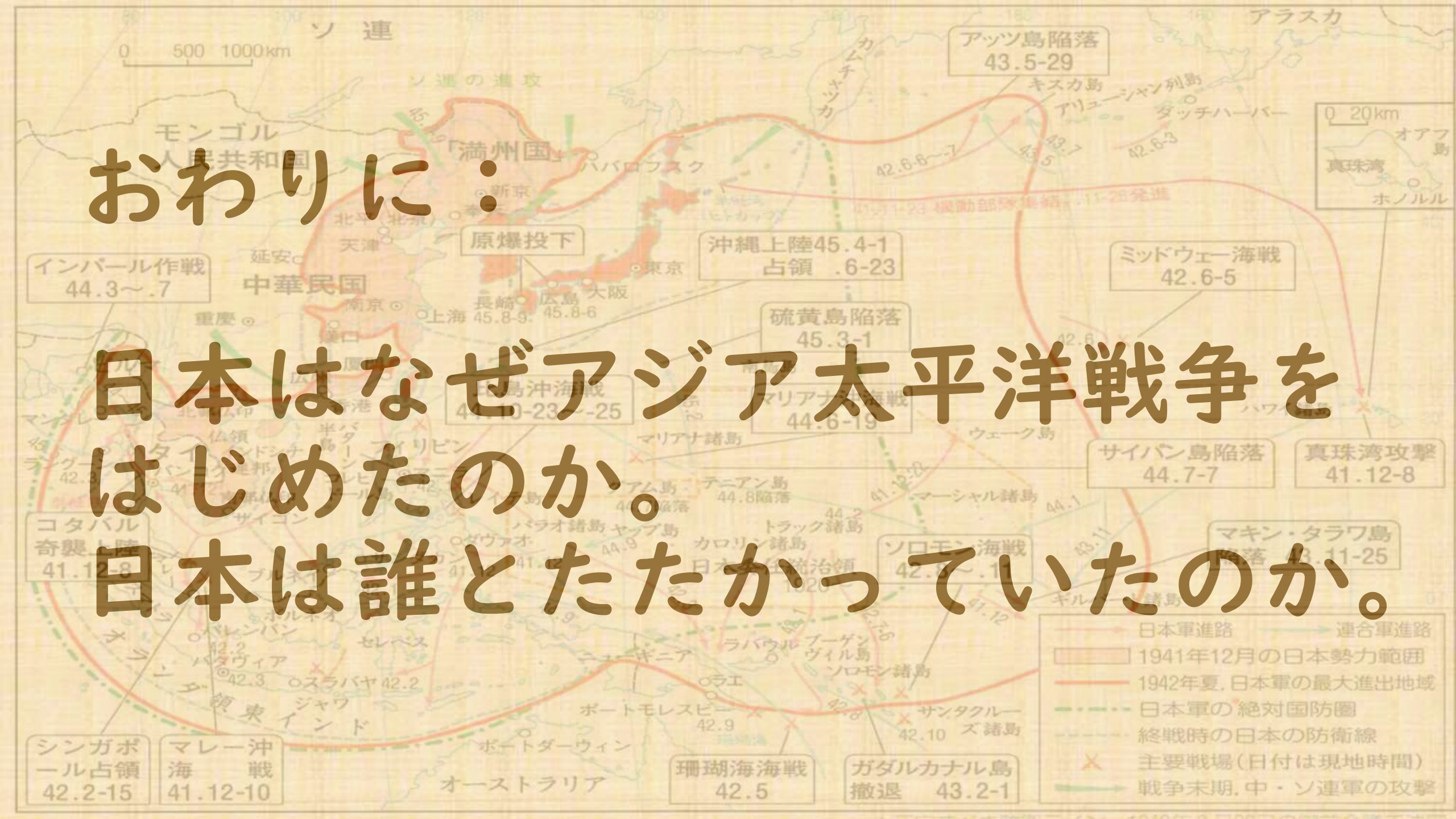
⇒アジア太平洋戦争発生

⑤ドイツ・イタリアの対米宣戦

＝第二次大戦の世界大戦化

おわりに：

日本はなぜアジア太平洋戦争をはじめたのか。日本は誰とたたかっていたのか。



なぜ戦争を始めたのか
東条の説明

1)中国からの無条件全面撤退

2)南京(＝汪兆銘の傀儡)政府否認

3)日独伊三国条約の破棄、

というアメリカ側の条件は

「帝国の権威を失墜」させ、

「支那事変」を完遂できず。

「帝国の存立をも危殆に陥らしむる結果となる」

⇒これまでの日本近代の原則にかかわる問題と認識

※「大東亜共栄圏」は？

ただ今、宣戦の御詔勅が渙発せられました。
精鋭なる帝国陸海軍は、今や決死の戦いを行いつつあります。東亜全局の平和はこれを念願する帝国のあらゆる努力にもかかわらず、遂に決裂のやむなきに至ったのであります。
過般来、政府はあらゆる手段を尽くし、対米国交調整の成立に努力してまいりましたが、彼は従来の主張を一歩も譲らざるのみならず、かえって英蘭比と連合し、支那より我が陸海軍の無条件全面撤兵、南京政府の否認、日独伊三国条約の破棄を要求し、帝国の一方的譲歩を強要してまいりました。
これに対し帝国は、あくまで平和的妥結の努力を続けてまいりましたが、米国はなんら反省の色を示さず、今日に至りました。もし帝国にして彼らの強要に屈従せんと、帝国の権威を失墜、支那事変の完遂を切り得たるのみならず、遂には帝国の存立をも危殆に陥らしむる結果となるのであります。
事ここに至りましては、帝国は現下の時局を打開し、自存自衛を全うするため、断固として立ちあがるのやむなきに至ったのであります。

10月14日の閣議での東条陸相の発言

①駐兵問題は心臓である。陸軍はこれを重視している。

②米国の主張に服することは支那事変の成果を壊滅するものであり、満州国も危なくし、さらに朝鮮統治も危なくなる。

③支那事変では数十万の戦死者、数倍の遺家族、数十万の負傷者、数百万の軍隊と一億国民が戦場や内地で苦しみ、数百億の国費を費やした。

④本来なら領土割譲を要求するのが当然だ。日本は寛容な態度で臨んでいる。駐兵により事変の成果をうるのは当然であり、世界になんら遠慮する必要はない。巧妙な米の圧迫に服する必要はない。

日清・日露以来の既成事実の積み上げが妥協を困難にしている。

東条に見る開戦の論理
①中国撤兵と、日本・陸軍の権威・正当性

①「駐兵問題は心臓である」
　領土も得ず、「駐兵により事変の成果をうるのは当然」
②これといった成果を得ず中国戦線からの撤兵は
　「日中戦争の成果を壊滅する」
③「数十万の戦死者……数百億の国費」こうした犠牲は無駄になる。
　⇒「日清・日露以来の亡霊」、背景にある国民の不満
④「満州国も危なくし、さらに朝鮮統治も危なくなる」
　⇒一方的な主張と強引な論理、既成事実の上に成り立っていた
　　日本のあり方、とくに陸軍の権威・正当性が傷つけられ、
　　日本帝国主義に反対してきた人々を元気づける

11月5日、御前会議での東条のまとめ

アメリカの要求は①領土保全主権尊重　②内政不干渉　③無差別通商
④武力的原状打破不承認という九カ国条約の集約といえる内容だ。

しかし

①領土保全主権尊重は、支那事変だけでなく満洲国の承認にかかわる。

②内政不干渉という点では、汪兆銘政府との通商通信等の条約等も廃される危険がある。

③無差別通商は帝国の自存自衛にかかわる。隣接地帯の権利をも変更させられる。

④武力的原状打破不承認は、南西太平洋では認めてもよいが、支那のような国防上、資源の獲得上重要な地域はみとめられない。

満洲事変および支那事変はこのような（九カ国条約の）羈絆きはんを脱するためにやってきたのだから

東条に見る開戦の論理と、中国・世界
～国際秩序への挑戦と国際協調の復活

「満洲事変および支那事変はこのような（九カ国条約の）羈絆を脱するためにやってきた」

①1920年代…「新外交」＝国際協調と戦争違法化の時代

＝アジアではワシントン会議で締結された九カ国条約が象徴

東条…国際秩序への挑戦が満州事変～日中戦争と明言

②1930年代～　日本は独伊とともに国際秩序に挑戦

米英仏…恐慌による自国主義の広がり、破壊者へ宥和策

「小国」…連盟の理念、集団的安全保障や国際正義を重視

③中国…国際正義に依拠、国際対立を利用⇒国際協調を再建

⇔日本・枢軸国の孤立に＝国際正義への無理解

日本は誰とたたかったのか(1)

大西洋憲章（「英米共同宣言」）1941年8月

①英米は領土拡大を求めない

②関係国民の希望に反する領土変更を求めない

③政府形態選択の国民の権利と主権・自治を奪われたものに返還（民族自決）

④世界の通商・原料の均等状態での利用を共有(貿易の自由化と拡大)

⑤労働基準と経済的向上・社会的安全確保のための経済協力（労働条件と社会保障の改善）

⑥各国の平和

⑦公海での航行の自由

⑧強力の使用の抛棄、侵略を与える国の武装解除、軍備負担の軽減(軍縮)

日本はだれと戦ったのか(2)
日本の敵は米英仏蘭だけではない。

①日本の敵＝連合国共同宣言が示す戦争目的を共有する連合国(UNITED・NATIONS)

1942年1月連合国共同宣言には26カ国が参加、のちさらに21カ国が加盟

1)中国・アメリカ・イギリス・ソ連、

2)フランス・オランダ・ポーランドなどの亡命政府なども

②戦争目的＝生命・自由・独立・宗教的自由の擁護、人類の権利や正義の保持など

③この目的が戦争のあり方・戦後世界・日本を拘束する（はず…）

国際連合憲章・ポツダム宣言→日本国憲法

＜連合国共同宣言＞ 1941年1月1日

この宣言の署名国政府は大西洋憲章（中略）に包含された目的及び原則に(中略)賛意を表し、
これらの政府の敵国に対する完全な勝利が、生命、自由、独立及び宗教的自由を擁護するため並びに自国の国土において及び他国の国土において人類の権利及び正義を保持するために必要であること並びに、これらの政府が、世界を征服しようと努めている野蛮で獣的な軍隊に対する共同の闘争に現に従事していることを確信し、次のとおり宣言する。
(1)＜略＞
(2) 各政府は、この宣言の署名国政府と協力すること及び敵国と単独の休戦又は講和を行わないことを誓約する。

第二次大戦の勝利者は

①米英仏ソは勝利したのか

大西洋憲章の矛盾＝帝国主義国が民族自決を主張

英・チャーチルは民族自決に限定をつけようした

米が恐れた日本の宣伝⇒英米の植民地主義攻撃

日本もこの部分を強調しようとしたが（大東亜共栄圏）

②大西洋憲章・連合国共同宣言の精神の広がり

⇒戦後のアジアアフリカ諸国の独立へ

③大国主義による世界支配（ヤルタ体制）

大西洋憲章の理念を破壊⇒「冷たい戦争に」

「日本切腹、中国介錯」

我々＜中国＞は、3、4年の間は他国参戦なしの単独の苦戦を覚悟しなければならない。

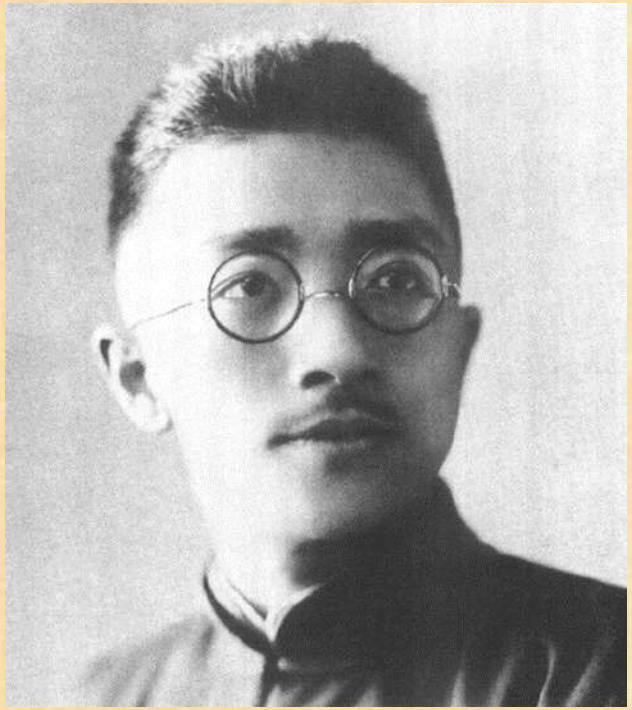
日本の武士は切腹を自殺の方法とするが、

その実行には介錯人が必要である。

今日、日本は挙国切腹の道を歩いている。

上記の戦略は「日本切腹、中国介錯」という8文字にまとめられよう。

1935年の胡適の書簡より



胡適

参考文献

鹿錫俊『蒋介石の「国際的解決」戦略1937－1941』
麻田雅文『蒋介石の書簡外交（上）』
笠原十九司『日中戦争全史（上）(下)』　臼井勝美『新版日中戦争』
入江昭『太平洋戦争の起源』『日本の外交』
川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』
木畑洋一『日独伊三国同盟と第二次大戦』原田敬一『戦争の終わらせ方』
吉田裕『アジア・太平洋戦争』吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』
伊香俊哉『満州事変から日中全面戦争へ』森武麿『アジア・太平洋戦争』
江口圭一『二つの大戦』『十五年戦争小史』
NHK「開戦 太平洋戦争～日中知られざる攻防・完全版」(2021.12月放映)